

[美術館員随想]

美術館・博物館の所蔵品図録について

当館次長 成瀬不二雄

美術館や博物館にとって一番重要なのは、その館にどのような特色を持ったコレクションがあるかということでしょう。

この場合、大ていの私立の施設は、まず公開すべきコレクションがあって、それを展示するために館の建物を作る場合が多いようです。ところが、最近多く開館する公立の施設は、われわれの県（あるいは市町村）にも、美術館や博物館が欲しいという県民（あるいは市町村民）の要望があって、またはそのような要望があると当局が予断して、展示施設が作られたものと考えられます。この場合、コレクションを作ることよりも、まず建物を作ることが先決だという望ましくない傾向になりやすいのです。

かつて、公立の美術館や博物館では、有名建築家に依頼して立派な建造物を建て、学芸員などの人員も確保したものの、そこで公開すべきコレクションがほとんどないという現象がよく見られました。そこで、このような館の学芸員は借用展示の準備のため、振り廻されていたものです。

しかし、最近ではこのような弊害が次第に反省されるようになり、公立の施設においても開館の前の準備期間において、ある程度のコレクションを作っておかねばならないと考えられるようになったのは、当たり前とはいえ、大いに喜ばしいことです。

もちろん、その準備期間は十分とはいええない場合が多いですし、またその蒐集活動も開館後には行われなくなってしまうか、あるいは行われても低調になってしまいがちです。また、その蒐集についても、山梨県立美術館が、ミレーの絵画のコレクションによって、多くの観衆を集めているため、何

か目玉になる美術品を入手して、客寄せをはかろうとする傾向が強いのは困ったことです。もちろん、多くの観客を集めるのはよいことで、それ自体は少しも非難されるべきことではないでしょう。しかし、客寄せの目玉になる美術品は、そう簡単に入手できるものではありませんし、そのような蒐集態度をとることによって、美術館や博物館の蒐集活動の正道からはずれないようにしたいものです。

このように、いろいろの問題を残すとはいえ、とにかく公立の施設においても、まずコレクションを作ることが第一歩だと考えられるようになったのは、大変結構なことです。かつては美術館や博物館の所蔵品図録というと、歴史の古い国立の施設か、比較的所蔵品に恵まれた私立の施設で作られる場合がほとんどでしたが、最近では多くの公立の施設が所蔵品図録を出版するようになってきました。

私どもの大和文華館の場合は、昭和35年秋に開館しましたが、その前に約15年ほどの準備期間があり、この間は主に所蔵品の充実に努めておりました。そこで、量の上ではともかくとして、質の上では優秀な東洋美術のコレクションができました。

そこで、当館では開館時の昭和35年11月1日に、所蔵品のうち国宝や重要文化財に指定されているものを中心として、主要な美術品を紹介する「大和文華館名品図録」を出版し、以後昭和39年10月1日と昭和45年8月1日とに、改訂増補版を発行しました。

元来、この種の図録は名品の鑑賞を主な目的としますので、昨年11月1日には開館35周年を記念して、図版をすべてカラーにした「大和文華館名品図録」(第4版)を出版し、現在に至っています。この

図録には掲載美術品についての要目のほかに、最近の研究成果に基づく解説が付けられていて、当館のコレクションの概要を紹介する上で、まず十分だと考えています。

この種の名品図録は国・公・私立にかかわらず、ほとんどすべての博物館や美術館において発行されているようです。ところが、専門家を中心として、その館のコレクションの主要部分だけではなく、その全容を知りたいという要望がよくあります。しかし、所蔵品の全部を掲載した図録となると、どうしても大冊となり、扱いにくく、価格も高くなってしまいます。また、そのコレクションのすべての分野にわたる全貌ではなく、その美術館に所蔵される絵画なら絵画、陶磁器なら陶磁器など限られた分野だけについて、詳しく知りたいという希望もあります。

このような希望に応じるため、大和文華館では名品図録のほかに所蔵品を種類別に分けた分冊図録も発行しています。

現在のところ、それは「日本陶磁」、「絵画・書蹟」(日本篇)、「漆工」、「陶磁」(朝鮮・東南アジア・中近東・欧州)、「彫刻・金工・玉石・硝子・染織・その他」、「富岡鉄斎」、「中国陶磁」、及び「絵画・書蹟」(中国・朝鮮篇)の8分冊からなっています。

もちろん、当館では現在でも蒐集活動を続けているため、所蔵品の量はゆつくりとですが、確実に増えていきます。そこで、当館では名品図録や分冊図録を再版するたびに、それについての改訂をおこなうようにしています。

(所蔵品図録等のお問い合わせ、ご注文は当館・管理部まで)



光琳筆中村内蔵助像(部分)

中村内蔵助とそのお墓

尾形光琳が描いた『中村内蔵助像』(当館蔵)によって、その人は36歳のまま生きつづけています。中村内蔵助は京の銀座の役人であり、たいへんなお金持ちでありましたが、のち、銀座汚職事件に連座して、家・財産は没収され、正徳4年(1714)に三宅島に流され、のち赦免されて帰京し、享保15年(1730)4月25日に62歳で亡くなりました。失意の晩年でした。内蔵助のお墓は、京都二条樋口の浄土宗・善導寺にあります。いまは、無縁の墓になっていますが、内蔵助にこころをよせるご住職と三吟堂・八木勇一氏によって手厚く供養されています。砂岩製の墓の正面に、みごとな字で「瑟瑟室風竹居士(内蔵助)、玄々庵本皓大姉(内儀)」と刻まれています。(林)



内蔵助の墓(京都・善導寺)

季刊 美のたより No.115

平成8年5月23日

発行 大和文華館